猫の命は九個ある

新許曳舟

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
猫の命は九個ある

【Ｎコード】
Ｎ８０７１Ｇ

【作者名】
新許曳舟

【あらすじ】
「猫の命は九個ある」と言うお題で山月さん（ｈｔｔｐ：／／ｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｇ．ｐｈｐ?ｃ=Ｗ０５５８Ｅ）が書いてくださった詩に、文をつけてみました。

新しい服

俺は猫だ。
名前はまだないし、多分これからも付くことはないだろう。

薄暗い中でにゃあにゃあ鳴いていたのが最初の記憶だが、どうして主人の所までたどり着いたのかは定かではない。聞くところによるとどうも猫鍋にされかけていたところを助けられたらしいが、それにしては主人は情け知らずである。
しかもこの主人、「学生」などと言う人間のなかでも頭も行為もよろしくない品種のようで、酒に酔っては俺の尻尾をむんずとつかんでぶら下げたり髭を引っ張って切り落としてくれたり狼藉のし放題である。この頃では「この足は肉付きがよくて旨そうだ」と言って人の足をじっと見たりしている。
人はかような主人のことを「勉強熱心だ」と評しているようだがところがどっこい、主人は机に向かいながらよだれを垂らして惰眠を貪っているだけである。

さて今日もいつものごとく主人と夕食を食べていると山月（サンゲツ）くんが現れた。いったいこの男は花が咲く前に既に枯れかけている主人のような奴と話して何が面白いのかと思うのだが、馬が合うのか何なのか足繁くやってくる。おまけに今日は手に何やら大きくて泥臭い包みまで抱え込んでいるときた。
「おいおいクシャミ、猫に猫まんま食わせちゃいけねえってこの前言っただろうが。キャットフードを買え、キャットフードを」

「うるせえな、人間様と同じ飯だぞ？」
山月くんは俺の粗食に意見を奏したようだが主人は一向に意に介さない。
「てめえが猫まんま食ってんのは金がねえからだろ」
「そうだ。自分が食うものも買えないのにキャットフードが買えるか。だいたいキャットフードだって日本語訳したら猫まんまだろ」
我が主人ながら口の減らない奴である。
「大体お前は何の用があって来たんだ」
「用が無きゃ友達の部屋に来ちゃいけねえのか」
「いけないね」
「つれない奴だ」
そう言いながら山月くん、ごそごそと泥臭い包みのビニール袋を剥がし始めた。俺が近寄って見ると、どうも魚のようだ。しかし見たことの無いものである。
「何だそれは」
わが主人の方も興味をそそられたと見て、飯粒を頬に付けたまま首をのばしてきた。
「ナマズだよ、ナマズ。俺が取ってきたんだ」
得意そうに山月くんが言った。
「しかしナマズをどうしようってんだ」
「決まってんだろ、食うんだよ」
「食えんのか？」
「知るかよ。だが毒があるという話は聞いたことがねえからな、多分食えるだろ。揚げたら良さそうだろ？」
適当だ。ようよう猫まんまを食べおわった馬鹿な主人もそれは感じたようで、「うーん……」と唸っている。
「でけえもんはうめえんだよ。ナマズなんてでかいドジョウだ」
あっさりと山月くんが言った。手はもう包丁をナマズに突き立てている。
微妙な顔をしながら主人が食卓の上で泥と魚特有の匂いを漂わせる

ナマズを見ていると、また勝手に玄関を開けて今度は酩酊くんと水仙くん、西風くんが現われた。皆思い思いにビール瓶や日本酒の瓶を抱えている。
「お、それがナマズか。ははぁ、ひげがにょろにょろしてら」
挨拶もなく人の部屋のなかに上がり込んでくる三者。俺は誰かに大事な尻尾を踏まれる前に棚の上に退避した。
「それを揚げるのか？しかしどうやって？この部屋にコンロはないぞ？」
と水仙くん。
「ほらあれだよあれ…何つったか、魔法の板だよ。『ピッ』てなる奴…」
がさがさと勝手知ったる主人の棚から包丁を取って酩酊くんが山月くんの隣に並ぶ。
「ＩＨか。ＩＨクッキングヒーターのことだろ。どうでもいいが物理学科が『魔法の板』は止めろ」
主人は立ち上がった。「魔法の板」を取りに行くのだろう。
「そういや三太はどこ行ったよ」
「三太か。あいつは女んとこだ……よ痛ッ！指切った！三太の馬鹿野郎！」
「何だそんなのも切れないのかよぶきっちょだなあ。だから女が満足しないんだ、んで他の男の所に行っちまうんだ」
「うるせえ貴様！男はハートだ！心だ！それがわからん女に用はないっ！」
「ハートやテクニックより前にてめえはその洋服をなんとかしろ」
「おい、小麦粉が見当たらんのだが、これは素揚げにするのか？」
「それ以前に油が無いっすけど」
「よ、洋服？」
「この前唐揚げ揚げたときの残ってなかったっけ」
「新しい服でも買えってんだ」
「味付けどうする？」

「て言うか俺は刺身のまま食いたい」
「刺身はやばいだろ刺身は。生だし」
一人と一匹でさえ狭い主人の部屋は五人と一匹でもうわやくちゃだ。しかも各々が好き勝手なことをして好き勝手に喋り散らしているので何が何だか分からない。
それでもしばらく見ていると、何とか揚げるところまでこぎつけたようだ。先程まで主人の猫まんまが乗っていた卓袱台の上に代わりにやって来た「魔法の板」と鍋を五人で阿呆のようにじっと見つめていたと思ったら今度は揚がった奴を巡って「お先にどうぞ」「いやいや、そちらこそお先にどうぞ」と始めた。
やがてついに決心を固めたのか、「えい」と西風くんが揚げたナマズを口に入れた。
「おおっ、うめえぞこれ！」
「だから言ったろ、でけえもんはうめえんだって」
山月くんは得意そうだ。
西風くんが手を付けたのをきっかけに皆次々にナマズに手を伸ばす。主人がその内ひとかけらを俺に投げてきたが、俺はそんな油っぽいものは嫌いなので無視する。
「それにしてもあれだ、酩酊、お前は洋服をなんとかしないと本当にまずいな」
主人は強くもない酒を飲みながら言った。隣では既に山月くんが潰れている。
「そうだな、お前はまず服のセンスが課題だな」
「んだんだ」
「そうかあ？」
皆が好き好きに酩酊くんに言うが彼はあっさりとしている。
「じゃあ俺の服選んでくれよ」
「ざけんなよ何で男と買い物に行かなきゃなんねえんだ」
「だからと言って人の服にいちいちけちをつけんなや」
「ダメなもんはダメなんだからしゃあねえだろ」

はてさて人間というものは不便なものだ。俺ら猫のように毛皮を持っていないからいちいち服を取り替える必要がある。しかもその色形を巡ってああだこうだと言い合っている。
やがて酩酊くんも主人も頭を垂れていびきをかき始めた。水仙くんも西風くんも舟を漕ぎながらむにゃむにゃと何かを言っているだけだ。ビールの入ったコップが残っている。
俺は前よりかねて人間の飲むこの酒というものが気になっていた。いい機会だから飲んでみることにしよう。死んでから悔やんでもおっつかない。
勢い良くぴちゃぴちゃやってみると驚いた。ぴりぴりと舌先を刺されるようだ。しかし我慢して主人の残したのを飲んだ。山月くんのも飲んだ。ついでに卓袱台の上にこぼれたのまで舐めとる。
すると何やら体がふらふらとしてきた。何やら面白い。狭い部屋中を蹟きながら徘徊してみたくなる。外に出たくなったがどこかに開いた窓はないだろうか。
粗末な風呂場まで来て、奥の窓が開いているのが見えた。よしそちらにいこうと思って足を踏み出したらぼちゃんという音がした。やられた。どうやられたのかとにかくやられたと思うばかりで気が付いたら水のなかだ。
慌てて水を掻いたらがりりと手応えがあって顔が僅かに水面に覗いた。不精者の主人が張りっ放しにしておいた風呂のなかに落ちてしまったようだ。だがどうあがいても淵からでられそうにもない。辛うじて起きている水仙くんも俺の窮状には気付かないようだ。
がりがりと淵を引っ掻いて浮き沈みを繰り返していたが段々体が疲れてきた。もう潜るために掻くのか掻くために潜るのやら判然としない。俺はもう無駄な抵抗はやめにすることにした。次第に楽になってくる。いや楽すらも感じられない。

俺は死ぬ。死んで太平を得る。南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏。ありが

たいありがたい。

新しい靴

昔、『長川』と呼ばれる川のほとりに、粉引きがいた。
粉引きには子供が三人いたが、三男は前に水車に挟んで足を折ってしまって、いつもびっこを引いていた。なものだから、三男は『長川のひょこひょこ三郎』と言われていた。

ある時この粉引きは死んでしまった。残ったのは水車小屋とロバと、それから猫――――この俺だ。
長男はもちろん水車小屋を取ったし、次男はロバを取った。三男は余った俺を連れて家を出たが、「この猫を食べて、それから毛皮にして三味線造りに売った後はどうしよう」などとのたまった。
俺はこの言い方にかちんと来た。食うだって？売るだって？冗談じゃない。
だから言ってやった。
「ご主人様、あなたの分け前はそう悪いものでもありませんよ」
って。
それから、
「下駄を一足と袋を一個下さいましたら、それをお目にかけましょう」
って。
主人――――『長川のひょこひょこ三郎』はぽかんとした顔をしていたが、それでも俺に一足の下駄と布袋を一つくれた。俺は下駄を履き、貰った袋に藁を入れたのを持って原っぱへ行った。
袋を開けて待っていると、子ウサギが藁を食べようとして袋のなかに入った。俺はすかさず袋の首を絞めてウサギを殺し、お殿様の所

へ行った。そして
「空場卿からの贈り物です」
と言ってお殿様に献上したのさ。
え、「空場卿」って誰かって？『長川のひょこひょこ三郎』には名字なんて物が無かったからね、俺が勝手に「空場」と名付けたのさ。
次に俺は麦を袋に入れて山のふもとへ行き、そして同じように袋に入った雉を殺して殿様に献上した。そんな事を二、三ヶ月も続けているうちに殿様はすっかり空場卿の事を気に入ってくれた。
ある時、殿様が川沿いに国内を見回るそうだと聞いた俺は、主人に川で水浴をするように言った。主人は「えぇ？」と訝しげな顔をしながら、それでも服を脱いで川に入った。
俺は急いで主人の洋服を隠し、そして殿様のお籠が来るのを見て騒ぎ始めた。
「大変だ！大変だ！空場卿のお召物が盗まれてしまった！大変だ！あの盗人め！見つけたら相応の処罰をしてやる！」
これを聞いた殿様はお籠をお止めなさって、空場卿に着物を持ってくるように言って臣下を急いでお城にやった。
戻ってきた臣下に着物を貰って着ると、元から見目麗しい青年だった『長川のひょこひょこ三郎』はとても美しくなった。ちょっと足を引きずるのは元のままだが、これなら本当にどこかの名家の出身だといっても通じるだろう。
俺は殿様に
「助けて頂いたお礼に空場の家でおもてなしをさせて頂きとうございます」
と言い、主人には小さく
「このまま真っ直ぐ進んできなさい」
と言って、お籠の前を走り始めた。
しばらく走っていると立派な畑があった。そこで鍬を持っていた百姓に聞くと、ここいらへんはずっと何にでも化けられる山婆の持ち物だという。山婆はどこに住んでいるのかと聞くと、この道をずっ

と真っすぐ行ったところの屋敷だそうな。こりゃあ好都合だ。
「いいか、すぐにこの横を殿様が通るだろうから、その時に『ここは誰の領地じゃ？』と聞かれたら『空場卿の物で』と答えるんだぞ」
「んだども猫様、そげなことしたら何にでも化けられる山婆が……」
「山婆がなんだ！俺の言うとおりにしないと八つ裂きにして食ってやるぞ！」
「ひぃ！それはご勘弁を！」
これで大丈夫だ。下駄を履いた俺が更に走っていくと今度は立派な田があった。そこにいた百姓に言う。
「いいか、すぐにこの横を殿様が通るだろうから、その時に『ここは誰の領地じゃ？』と聞かれたら『空場卿の物で』と答えるんだぞ」
「んだども猫様、そげなことしたら何にでも化けられる山婆が……」
「山婆がなんだ！俺の言うとおりにしないと八つ裂きにして食ってやるぞ！」
「ひぃ！それはご勘弁を！」
これでよし。俺は更に走って走って、遂に山婆の屋敷に着いた。山婆は丁度仲間とともに宴会を開くためのご馳走を作っているところだったが、俺が「ご主人にご挨拶がしたい」と申し出ると、山婆にしては丁寧に俺を迎えてくれた。
「山婆さまは何にでも化けられるそうですが、それはまことですかな？」
そう俺が聞くと、山婆は
「いかにも」
と頷いた。
「いやあ、何にでもと言ってもでぃだらぼっちほど大きくはまさかなれますまい」
と俺が返したら、
「何を？そんなのお茶の子さいさいだ。よしなってやろうでないか」
と山婆はでぃだらぼっちになった。俺は急いで逃げて、「しかし何にでもなれるといってもまさか一寸法師にはなれしまいますまい」

と叫んだ。
今度も山婆は
「何を？そんなのも簡単すぎてへそで茶がわけらあ。よしなってやろうではないか」
と言って一寸法師になったので俺は山婆を食い殺してやった。ちょうどその時殿様と主人が到着した。殿様は主人の領土の広さに感心していたし、山婆が仲間のために作っていたご馳走にも目を丸くした。実はこの時殿様の後ろには宴会にやって来た山婆の仲間たちがいたのだが、人間を恐れて入ってこなかった。
そして殿様は言った
「わが姫と結婚しないか、空場卿よ」
と。
もちろん断る理由なぞ無かったので主人は喜んでその申し出を受けた。そしてその日のうちにお姫さまと結婚した。

俺は殿様から位階と領地を貰い、もうネズミを追い掛けるなんてことは、遊びにしかしなかったのだった。

新しい鞄

俺はボスに言われて、仲間と共に山のなかに料理店を開いていた。
「しっかしさあ、こんな山奥に来る人なんて本当にいるのかね」
同僚の宮沢が言った。
「さあねえ。しかし俺たち猫の身分じゃあ町中にレストランなんて開けないだろ。客を食うのが目的だし」
「客を食うったって実際に食べるのはボスだけじゃないか」
「まあなあ」
その時、いきなり入り口のベルがりりん、と鳴った。またボスか、と二匹で顔を見合わせたら「ごめんください」と声がした。ボスじゃない、客だ！二匹して慌てて飛び出してゆくと、二人の人間が立っていた。開店以来初めての客だ、丁寧に扱わなくてはならない。
「すみませんお二方様！」
コートを脱がせ、鞄を預かる。いやに犬臭い匂いがしている。
俺が二人を席に案内して宮沢の所へ戻ると、宮沢は「どうします？」と俺に耳打ちしてきた。
「どうしますっておめえ……殺して塩もみしてサラダにでもするしかねえだろ」
「それはそうですけど、どうやって殺すんすか」
「それはやっぱ…俺らの爪でもって喉をかっ切るしか無いんじゃないのか？」
「でもそうすると、後で服を脱がせなきゃいけないですよねえ。面倒臭くないっすか？」
「じゃあおまえが脱がせてこいや」
「無理っすよー」
「じゃあ諦めろ。何を頼むか決まったらまた俺らを呼ぶだろうから、その時に二匹で行って一斉に喉を切るんだぞ」
二人はメニューを見ながらああだこうだと言い合っている。まだ決

まるのには時間がかかりそうだ。
ふ、と宮沢が客から預かってきた鞄を見ると、三毛柄でふわふわした毛が生えていて、何とも猫そっくりの表面である。
「な、何だ宮沢、その気味の悪い鞄は」
「あ、やっぱりそう思うっすか？気味悪いですよねえこれ」
「猫の毛皮が使われているように見えるのだが」
「やっぱりそう見えます？でも『毛皮使用』としか書いてないんすよ」
「それ絶対猫の毛皮だ」
「そうですかねぇ」
二人のうち一人が手を挙げるのが見えた。
「いいかい、『せーの』で一斉に爪を出すんだぞ」
「了解」
俺はそう宮沢に言って立ち上がった。後から宮沢がついてくる。
「はい、何でしょう」
「エビフライとサラダと……」
「なるほど、エビフライとサラダですね、承知いたしました……
『せーの』！」
俺たちは一斉に爪を出して二人の人間に突き付けた。
「うわあ」がたがたがたがた。
「うわあ」がたがたがたがた。
二人は泣きだした。
「レストランというのは、西洋料理を、来た人に食べさせるのではなくて、来た人を……」
俺が爪を突き付けたほうの人間が言った。
「まあそういうことですね。悪くお思いなさんな、今あなたたちを料理できなくては俺たちの責任になってしまうのでね」
二人はあんまり心を痛めたために顔がまるでくしゃくしゃの紙屑のようになっている。二人は泣いて泣いて泣いている。何、猫を鞄にするような奴だ、殺してボスに引き渡す前に少しぐらい痛め付けて

も罰は当たるまい。
その時うしろからいきなり、
「わん、わん、ぐゎあ！」
と犬の声がした。振り向くと白くまのような犬が入り口の扉を開けようとしている。しまった、やけに犬臭いと思ったら犬連れだったか！
犬が扉を抜けて走ってきた。俺と宮沢は逃げようとしたが向こうのほうが速い。あっという間に追い付かれて押し倒され、犬のくせに俺に馬乗りになって喉笛を噛み切りやがった。
だくだくと流れる血の中、俺は、『これで俺も皮を剥がされてあのように鞄にされるのだろうか』と思った。

新しい本

その時の俺は、まだ子猫だった時分に、町の小僧に頭を万力で挟まれて右の方へ何回か頃合いの程度に捻られてしまっていた。俺は自分では自分の顔と頭がどうなっているのかさっぱり分からなかったが、だが普通ではないのは分かった。皆が俺の顔を見て嘲笑うからだ。更に笑えることに、俺はネズミを取るのに成功したことはなかったし、塀の上から飛び降りたり、またその逆をするのも滅法下手だった。よく失敗して石畳のゆかにべちゃりと叩きつけられているのを見られては余計に嗤われていた。

俺が他の奴から嘲笑される理由はもう一つあった。
万力で挟まれたときに何かあったのか、俺は人間の『文字』とやらが読めるようになっていたのだ。
ネズミも取れない、喧嘩も弱い。いつも俺は腹ペコだったが、そんな時は人間が捨てた本を読んで過ごした。世界は海でつながっていること、小麦は畑で作られること、政治のこと、騎士道のこと、それから弁証法や真理について……。本の大部分は俺の生活にはまったく関係の無いことばかりだったし、猫の手でページをめくるのは大変だったが、俺は本を読むのが好きだった。そして読みおわった後、内容について考えるのも好きだった。

いや、『好きだった』と言うより、『他にできることが無かった』と言った方が正確かもしれない。

そんな俺は、いつも『図書館』という建物が気になっていた。大きくて立派な建物で、町中で一番高い塔を持っていた。中には本が沢

山あることは分かっていたが、猫は入った瞬間に摘み出されてしまう。いつしか俺は、腹ペコで本を読みながらどうやって図書館に入ろうかと考えるばかりになっていた。

その頃巷では妙な病気が流行り始めていた。『黒死病』という奴で、人間が黒くなって死ぬ病気だ。感染力が強く、ネズミが菌を撒き散らしているらしい。
この病気ですぐに沢山の人が死んだ。しかし病気は衰える気配を一向に見せない。町の人は恐怖におののいた。おののいたまではよかったが、うち一人がこんなことを言い始めた。
「猫だ、猫に災厄を負わせればいいんだ」
とんでもないことである。（俺を除く）猫はみんなネズミを捕ってペスト撲滅に協力していると言うのに。
だが町の人々は、亡者になったように猫を追い掛け始めた。普通の猫ならそうそう人間に捕まったりはしなかったが、鈍臭い俺はあっという間に、そしていの一番に捕まってしまった。

「何だこの猫。ヒッコリーの実のような頭だし、髭もないし、何か不気味な穴だなこれは……鼻の穴か？」
俺を捕まえた人間はそう言った。そして「まあ、いかにも災厄って顔してら」と俺の首根っ子をつかんで図書館へ入った。
初めての図書館はすばらしいものだった。見回すと本しかない。目を閉じると一面本の匂いで満ち溢れている。俺は逃げ出すのも忘れてうっとりとその匂いを嗅いでいた。
俺を捕まえた人間はずんずんと階段を上り、やがて町一番の時計台のてっぺんにやって来た。猫といえど落ちたら助からない高さだ。

ひょう、と強い風が吹いている。俺が目を開けて下を見たら、人間の海が下に見えた。黒死病で沢山の人間が死んだと聞いたが、まだまだいるじゃないかと俺は思った。

そして俺をつかんだ人間は俺をそこから放り投げた。

高く、高く、俺は空に浮かんだ。

人間どもの拍手喝采が聞こえた。

この俺は無関係な存在なのに。

新しい歌

少し昔の話です。

ある町あるところに、サラと言う若い女性がいました。

サラは両親がいなくて、カルヴィラ卿の家で働いていました。洗濯や掃除をしたり、　毎日の食材を買いに行ったりするのが仕事です。

サラには恋人がいました。セシルという名前で、船乗りで、なかなか会うことが出来ませんでした。

サラは毎日買い物に行くと、必ず橋の上で歌を歌います。欄干に腰掛けて、海の方を向いて、彼の好きな歌を歌うのです。

毎日町の人たちもそれを楽しみにしていて、サラが欄干に座ると、途端に町中がしいんとするのでした。

ある日、いつものようにサラは買い物に出かけました。今日コックに頼まれたのは白身魚でした。

ムニエルかしら、とサラは考えます。

カルヴィラ卿は優しいお方でしたので、召使にも、勿論卿のものよりは質素でしたが、同じ物を出してくださるのです。

いつものようにサラは市場で買い物をして、それから橋の欄干に上りました。

するといつものように町中がしいんと――――――

なりませんでした。

みぃ、みぃ、と小さな鳴き声が聞こえています。
普段の市場では小さすぎて聞こえないぐらいの声です。ちょうど、サラの下あたりから聞こえてきました。
「何かしら」
欄干を降りて、サラは橋のたもとに下りました。すると、黒っぽいずぶ濡れの固まりが、もぞもぞと動きながら、みいみいと鳴いていました。子猫です。辺りには母猫も、兄弟の姿もありません。

「あら、どこから来たのかしら？」
サラは子猫をつまみ上げて、橋の上に戻りました。すとん、と石畳のうえに置くと、真っ黒い子猫は真っ赤な目を閉じて、ぶるぶるっと体を震わせました。
サラは袋の中から牛乳の瓶を取り出して、ミルクを猫にやりました。牛乳が半分になった頃、沢山飲んで満足したのか、黒猫は欄干の上に上ってくるりと丸くなりました。サラも欄干の上に座り、ようやく歌を歌い始めました。遠い海の上の彼に響くように。町中に響く、美しい歌声です。町中の人が聞き惚れました。

歌い終わると、サラは猫に、「ごめんね、君の事は連れて帰れないんだ」といいました。
カルヴィラ卿はそれはそれはお優しい方で、子供も動物も大好きだ

ったのですが、カルヴィラ卿の犬はそうではなく、まだ小さかった頃に猫にいじめられたとかで大層な猫嫌いだったのでした。
「でも、絶対明日も来るからね」
そう言って、サラは帰っていきました。

次の日も、サラはいつものように市場に買い物に来ました。今日は買い物袋だけでなく、大きなバスケットも抱えています。いつものように買い物を済ませ、サラは橋のところに来ました。
「猫ちゃん、いる？」
橋の下を覗き込んで呼ぶと、みぃと小さな声がしました。とことこと歩いてきたのを抱き上げて、サラはミルクをやりました。牛乳を飲んでいる猫を撫でながら、
「猫ちゃんの名前を考えたんだ。真っ赤な目をしているからクコ。どう？」
とサラは首を傾げました。
気に入ったのかいないのか、猫はみぃ、と鳴いて、口の周りをぺろりと舐めました。
それから一人と一匹は欄干の上に座り、サラは歌を歌いました。
歌い終わると、サラはバスケットを橋の下において、そこに猫を入れました。
「今日からここがクコの家だよ」
気に入ったのかいないのか、猫はみぃ、と鳴いて、バスケットの中で丸くなりました。

いつしか、それがサラの毎日のうちの一部になりました。
市場に来て、買い物をして、クコに餌をやってから、橋の上で、クコと一緒に歌って、帰る。
サラの節に合わせて、クコが鳴くのです。
クコは市場の人たちとも仲良くなり、鼠を捕っては喜ばれるようになりました。けれども、どんなに遠くまで行っていても、サラが買い物に来る時間には必ず橋の上にいるのでした。

そして時がたち、クコは立派な一人前の猫になり、季節は冬になりました。

ある日、カルヴィラ卿に熱いココアをお出しして、就寝の許可を貰って廊下に退出したサラは、白い息が出ることに気がつきました。
「おお寒い」
窓の外を見ると、雪が降ってきているようです。明日には凍え死んだ鳥がそこここの地面に落ちているのだろうなと思ったサラは、クコは今頃どんなに寒いだろうかということに気がつきました。
「まあどうしましょう」
クコは橋の下で、バスケットに入っているだけです。雪はしのげても寒さはしのげません。今頃凍えているに違いありません。サラは急いで自分の部屋に戻り、古い毛布をもってそうっとお屋敷を抜け

出しました。急いで橋に向かって走ります。

「クコー？」
はあはあと白い息を切らせて橋の下を覗くと、案の定凍えた姿のクコが、みぃ、と弱弱しく鳴きました。あわててバスケットの中のクコを抱き上げ、サラは毛布でくるみました。
「もう大丈夫よ」
ふぅ、と安心してサラは息をつきました。

すると、不意に、しゃんしゃんしゃんと馬車の鈴の音が聞こえました。
「誰かしらね、こんな夜更けに……病人でも出たのかしらね」
サラは少し気味が悪くなってクコに話しかけました。鈴の音はだんだんとこちらに近づいてきていますが、真っ暗で何も見えません。サラがランプを持ったままじっとしていると、鈴の音は橋のすぐ横を通ってゆき、そしてそこで止まりました。

ガタリと誰かが降りた音がして、
「サラ！サラじゃないか！」
サラの恋人の声が聞こえました。
「セシル！どうして！？」
サラは叫び、暗闇の中から現れたセシルの腕を取りました。
「急に帰れることになったからね、サラに会おうと思って馬車を飛

ばしてきたんだよ」
「まあ……びっくりしたわ！」
ほうっ、とサラは白い息をつきました。そして、それにしてもセシルの顔色が白いようだけれど、と彼の顔を眺め、きっとランプのせいだわと思い直しました。
「とりあえず僕の家においでよ」
セシルはサラの腕をぎゅっと握りました。サラは冷たくてびっくりしましたが、きっと寒い中馬車を飛ばしてきたせいだろうと思いました。
「そうね、でもカルヴィラ卿が何とおっしゃるか……」
「なに、朝卿が起きるまでに戻っていればばれないさ」
「そうね」
そう言うと、サラはクコをバスケットの中に戻し、橋の下におきました。
「ばいばいクコ、また明日ね」
そしてセシルと腕を組み、馬車へと乗りました。にゃぁ、とクコが鳴きました。
しゃんしゃんしゃんしゃん、と鈴の音が遠くなり、

そしてそれっきり、サラを見たものはありませんでした。

雇い主のカルヴィラ卿は、彼女のことをとても心配して、八方手を尽くして探しましたが、何の手がかりもありませんでした。町の人たちも、彼女のいないことを悲しがり、もう彼女の歌が聞こえないことを残念がりました。

そして春になり、彼女の恋人の乗った船が南の海上で難破し、誰一人助かった物がいなかったという話がその町にまで伝わってきました。

それは冬の間だったのだということで、町の人たちは、「きっと彼がサラを迎えに来たのだろう」と口々に言い合いました。

今でもその町はそこにあり、その橋はそこにあります。

そして、その橋の下に住み着いている、真っ赤な目をした黒猫は、毎日決まった時間になると欄干の上に座って、悲しげに歌を歌うのです。

新しい場所

俺は偏屈爺さんの家で飼われている猫だ。どれくらい爺さんが偏屈かって、奴ほど人を困らせる人間もそうはいないだろう。
さて、そんな爺さんでも人手が無くなると困るとみえて、ある日カズミと言う名の甥っこを家に呼び寄せた。カズミは働き者でしっかりしていて賢くて、とても主人の血縁者だと思えないような子だった。この新しい場所で何をやるのだろうと胸をわくわくさせているのが俺からでもよく分かった。
カズミを家にいれると、爺さんは突然
「この家にはこの家の流儀がある。まずそれを覚えてもらいたい」
などと言い始めた。やれやれ、また何か始める気だぞと俺が見ていると、主人は突然俺を指差した。
「してカズミ、おまえはこれを何と呼ぶ?」
「猫です、お爺さん」
「ならんならん、ここではこいつは『ネズミネライ』と呼ばなくてはならん」
またこの爺さんは何を言いだすのか、今までそんな事を言ったことは一度もないぞと俺は思ったが、正直なカズミ青年、
「はい、わかりました。『ネズミネライ』ですね」
と信じている。
次に主人は自分の木ぐつを指差した。
「してカズミ、おまえはこれを何と呼ぶ?」
「木ぐつです、お爺さん」
「そうか。だがこれはここでは『パタパタ、ドンドン』と呼ばねばならん」
「はいわかりました、『パタパタ、ドンドン』ですね」
やれやれ、主人の奴、後でまごまごして恥をかいても知らんぞと思ったが、主人の新たな名前付けは更に続く。

次に主人はカズミを居間に連れていった。面白そうなので俺もついていく。主人は暖炉の火を指して言った。
「ならばこれは何と呼ぶ？」
「火ですよ、お爺さん」
「だがこれはここでは『愉快、愉快』というものだ」
「はい、わかりました。『愉快、愉快』ですね」
主人はカズミを台所へ連れていって、今度は隅にあった瓶の中にある水を指差した。
「カズミや、これは何て言う？」
「水ですよ、お爺さん」
「そうか。しかしこれはここでは『たっぷり、ちゃぷん』だ」
「はい、わかりました。『たっぷり、ちゃぷん』ですね」
更に納屋へと主人はカズミを連れていく。そして干してあったまぐさを指して言った。
「じゃあこれは何て言う？」
「まぐさですよ、お爺さん」
「ふうん。だがこれはここでは『大地の髪の毛』だ。よおく覚えておくんだ」
「はい、わかりました『大地の髪の毛』ですね」

これで主人は満足したのか、もうこれ以上妙な名前付けをしようとはしなかった。

夜になった。
主人はもう寝てしまっていて、カズミは奥さんと暖炉のそばで話をしていた。俺は暖炉のそばで丸くなっていた。
そうしたらいきなり暖炉の火がぱちんと弾けて、俺のしっぽに燃え

移った。俺はあわてて走り回ったが、しっぽの火は消えようとはしない。気が付いたら納屋のまぐさに燃え移ってしまっていた。
「おじさん！おじさん！『ネズミネライ』が『大地の髪の毛』に『愉快、愉快』をつけちゃった！『パタパタ、ドンドン』を履いて、『たっぷり、ちゃぷん』を持って、すぐに来て！」
遠くでカズミが叫ぶのが聞こえた。だがあの偏屈爺さんはすぐにはその意味を理解しないだろう。
そうこうするうちに火がしっぽだけでなく足先や耳にまで燃え移ってしまった。

ああ熱い熱い熱い熱い熱い熱い熱い熱い熱い！

新しい出会い

その時の俺の最初の主人はある少女だった。
そしてその日の少女は、どのような理由があったのか知らないが、俺を抱いて街を歩いていた。すると道の真ん中で薄汚い少年に声をかけられた。
「その猫を一ペニーで売ってくれませんか？」
その少年は言った。少女は少し迷ったが、結局夕飯のパンの代わりに俺を売った。
「この猫は本当によくネズミを捕るんだから、あんたなんかに一ペニーで売りたくないのに」
なんて余計なことを言いながら。

こうしてその少年、ディック・ウイッティントンが俺の新しい主人になった。

ディックの家は寒くてすきま風が吹き荒れていたが、ネズミが沢山いて好きなだけ捕ることができた。ディックの直属の上司である料理番のオバサンは怖くて自己中な奴だったけれども、そのほかの人は優しくていい人ばかりだった。特に澄んだ水色の目を持ったディックの主人の娘さんは俺たちによくしてくれた。

そんなある日、ディックの主人が新しく船を出すことになった。
その頃のしきたりとして、新しい船が出るときには何かしら自分の、商売する物を乗せて運試しをするというのがあった。だがディックは俺以外の何も持っていなかった。ディックは泣きながら俺を船に乗せた。俺の頑張りでディックにあてがわれていた屋根裏部屋のネ

ズミは大分減っていたが、すぐに元に戻ってしまうだろう。
船は、途中嵐にあうこともなく、俺は海に投げ捨てられることもなく無事にどこかの国に着いた。
船長以下船員のほとんどが見張りを残して下船した。俺は残った見張りと遊んでいた。
見張りの腕がすっかりくたびれて、俺の爪ですっかりぼろぼろになったはたきを足に挟んでいるのにじゃれるようになった頃、船長が血相を変えて走ってきた。
「猫だ！猫はどこだ！」
船長は叫んだ。
「そんなに叫ばないだって猫はここにいますよ。いったいどうしたんです？」
船員見習いの見張りがのんびりと言った。
「ああ、なんとこの国にはネズミが沢山はびこっていて困っているんだそうだ！」
「それで？」
見張りの船員見習いは首を傾げた。
「しかもこの国には猫がいないんだと！」
船長はまくしたてたが、
「それで？」
見張りにはよく分からないようだ。
「この国のネズミを退治できたら、船に一杯の金をくれるとよ！」
「それで？」

見張りはまだ意味が分からないらしく尚も首を傾げていたが、もう船長はそんなことに構ってはいなかった。俺を抱き上げて全力疾走していたからだ。
「王様、女王様！今ネズミを退治する獣を連れてまいりました！」
息を切らせた船長はそう叫んで王宮の食堂に駆け込んだ。一面でネ

ズミが食物を食い荒らしている。命ぜられるまでもなく、俺は船長の腕から飛び出した。
あっちで頭をを噛み千切り、こっちで尻尾をぶち切ってやったら、あっと言う間にネズミは一匹もいなくなった。
ふう、と俺がすべてのネズミを片付けて床に座ると、船長がすかさず俺を抱き上げた。そして女王様に差し出したが、彼女は俺を何だと思っているのか恐がって手を出そうとしない。船長が俺の頭を撫でて、それでも俺がおとなしくしているのを見てからようやく女王はは俺の頭を撫でた。サービスとして喉を鳴らしてやる。
そうして船長は俺を王さまに売り、ついでに積んでいた積み荷も全部売り、代わりに船が沈むほどの金を持って帰っていったのだった。

そして王様と女王さまが俺の新しい主人になった。

俺の前の主人、ディック・ウイッティントンは一体どうなったのだろうか。
それについては、再びこの国へ、今度は猫を山積みにした船でやって来た船長から聞くことができた。

俺がいなくなってからというもの、ネズミは可愛そうなディックを毎晩悩ませていたそうだ。更にディックが主人のお嬢さんのお気に入りであることに嫉妬した料理番のオバサンは、毎日ディックを何回もぶっていた。それが何ヵ月もつづくうちに遂にディックはその仕打ちに我慢ができなくなって、ある朝早くに家から逃げ出した。
走って走って走って走って、ディックは街を見下ろす丘の上に来た。ちょうどそこで道が二手に分かれていたので、ディックはどちらに

行こうかと思案しながら石のうえに腰を下ろした。するとその瞬間、街の鐘が鳴った。ディックにはその鐘が、

『戻ってこい、ウイッティントン！
三度、ロンドンの長となる！』

と言っているように聞こえたそうだ。本当にロンドンの市長に、それも三回もなれるのならば、あの料理番の仕打ちにも耐えようとディックは急いで家に戻った。そして料理番が起きる前に自分の寝床に戻ったのだった。
それからしばらく後、ディックの主人の船が戻った。

俺を売った船長、そしてディックの主人は立派な人だったので、俺を売った代金、つまり船一杯の金を、ネコババしたりせずきっちり全てディックに渡したのだ。ディックはいきなり彼の主人以上の大金持ちになってしまったのだ。
ディックはその金でまずみんなに贈り物をした。お嬢さん、主人、意地悪な料理番にまで。次に主人のすすめに従って豪洒な服を仕立てた。その服を着ると、ディックは誰も今まで見たことがないほど素晴らしい若紳士になった。そしてお嬢さんは、今までは単なる哀れみしか感じていなかったディックに惚れてしまった。
ディックは口元が特に可愛らしい、水色の目のお嬢さんと結婚し、そして三度ロンドンの市長になり、一回ロンドンの裁判官になり、それから最後にはナイトの称号までもらったそうだ。

ああ、ディック・ウイッティントン、哀れなちびだった俺の元主人。

俺はディックがいつまでも幸せであるよう祈りながら、今日も玉座の上に座ったネズミを食い殺すのだった。

新しい恋

明るい朝日が差し込んできて、俺は目を開けた。

俺は野良猫だった。

８回も生きてきただけあって、出会った猫に喧嘩で負けることはなかったし、誰よりも知識があった。だから沢山の雌猫が俺に求婚してきたが、一匹だけ俺に見向きもしない白い雌猫がいた。

俺はぐにぃ、と伸びをして、それから歩き始めた。

もちろんその白猫のところに行くためだ。

彼女は昔人間に飼われていた猫で、あまり喋るのは上手くなかった。だがどうやら頭は馬鹿ではないようで、それがまた俺には気に入らなかった。

日が射した農場のレンガ塀の上から飛び降り、春の朝の、まだ冷たい土を踏みしめて歩く。少し行くと、農場の中に立った大きなねむの木の下、いつもの場所に、こちらに背を向けて彼女がいるのが見えた。

もう起きているようだ。何だ、と俺は少し鼻白んだ。俺は今までこの白猫が寝ているのを見たことがない。

彼女は俺の近づく気配には気付いたはずだが、無視を決め込んだようだ。俺が白猫の前まで回り込み、空を見ていた彼女の視線上に割り込んで、そこでようやく彼女は俺に焦点をを合わせた。

そして俺をただじっと見つめた。

「俺は８回も……」

俺はいつものように言おうとして言い淀んだ。

最初に会った時から「俺は８回も生まれ変わったんだぜ」と言い続けているが、彼女は「そう」と言うだけで一向に効果がない。

それから、クシャミの所にいた話や、頑固爺さんの話もしてみたが、彼女はいつも聞き流しているだけだ。
「……」
彼女はじっとその大きな黒い目で俺を見ている。そこには特に何の感情もないようだ。
俺は何故だか、自分が非常にちっぽけな存在のようなような気がして、急に恥ずかしくなった。
「……」
「……」
しばらく見つめ合った後、俺は言った。

「……傍にいてもいいかい？」

ええ、と彼女は答えた。
俺は彼女の隣に座った。

俺はもう、「8回も～」とは言わなかった。

新しい旅

いきなりぴたん、と水滴が僕の額に当たった、と思ったら見る間にどしゃぶりの雨になってしまった。
「うわわぁわ……」
僕は、あまり意味はないけれど鞄を頭に乗せて辺りを見回し、目についた鉄橋下の通路に走り込んだ。
服に着いた水滴をはたき落としながら空を見ると、雨はしばらくは止みそうにない。仕事も首になった上に雨に降られるとは、全く踏んだり蹴ったりである。
さてどうしようかな、と通路の中を振り向くと、何故か大量のとうもろこしが投棄されていた。皮が付いたままのとうもろこしが、山のように通路に右側に積まれている。
「……なんでとうもろこし?」
声に出して呟いてから、そう言えば今年は野菜、特にとうもろこしが豊作すぎると言うのをニュースで聞いたような気がするな、と思った。
辺りは畑ばかりだし、誰かが捨てていったのだろうか。わざわざこんな所に捨てることもないだろうに。
まだ食べられるようなら貰っていこうと一つ拾い上げた。歩道の縁石に腰を下ろして、ぺりぺりと皮を剥く。とうもろこしの頭から豊かに伸びたヒゲが手に纏わりついてきてうっとうしい。皮が剥けるたびに、甘い日だまりのような匂いが強くなる。
「大丈夫……っぽいな」
少なくとも腐ってはいない。鼻を近付けて嗅ぐまでもなく、美味しそうな匂いがする。黄色い粒々の間から這い出してきた虫に息をかけて吹き飛ばす。
そのまま皮を剥いたとうもろこしを噛ろうかと思ったが、しかし今まで生のとうもろこしは食べたことがなかったので止めにした。

代わりに話し掛けてみる。
「お前も難儀だな。せっかく頑張って実になったのにいきなり『要らない』って捨てられちゃってさあ」
もちろんとうもろこしは何も言わない。
「僕だって……」
と続けようとして、後は言葉にならなかった。

僕だって…何なんだろう。

確かに不況の煽りで首にされてしまったが、だからといってこのとうもろこしのようかと言われると違う気がした。それよりも、間引きの時に抜かれてしまった芽のほうが僕には相応しいだろう。
「しっかし、雨止みそうにないけどどうしようかね」
アスファルトの屋根の向こう側は雨で暗く煙り、地面の上には早くも水溜まりが出来ている。
とうもろこしの皮が邪魔だったので剥ぎ取って足元に捨て、ヒゲをぶちっ、ぶちっと引きちぎってゆく。
「……ん」
ちょっと楽しい。
絡み付いたとうもろこしのヒゲが切れる感触が何とも言えない快感だ。ぷちぷち…正式名称をエアマットと言ったっけ?を潰す面白さに似ている。
皮とヒゲを取りのぞいたとうもろこしを鞄にしまい、背後に積まれた中からもう一個手に取る。
今度はヒゲだけぷちぷちとやる。これも貰っていこう。この際、もう持てるだけ貰っていこうか。でも鞄の中に入れたら虫が出てきそうだな……もう入れちゃったけど。しかもとうもろこしを抱えて公共の交通機関に乗るのも気が引ける。
そんなことをつらつらと考えている間にも、手は休むことなくとうもろこしのヒゲを引きちぎっている。気が付くと足元にはかつらが

出来そうなくらいのヒゲの山、脇にはヒゲをむしられたとうもろこし達が並んでいた。
「おい、お前何してんだ」
「う…うひゃぁ！すすすいませうわぁっ！」
いきなり声をかけられて、僕は持っていたとうもろこしを放り投げて立ち上がっ……たまでは良かったが、慌てすぎてとうもろこしの皮を踏ん付けてすっ転んでしまった。
「いてて……」
したたかに打ち付けた腰をさする。とうもろこしの持ち主が現れたのかと思ったが、辺りを見回しても人影はない。
……あれ、人影がないのにどうして今声がしたんだろう？ひょっとしてとうもろこしが喋っ……
「どこ見てんだよお前、こっちだこっち。足元だよ」
きょろきょろと再び首を巡らすと、ぺたんと座り込んだ僕の足元から声がした。
見ると、大きな赤茶の虎猫が一匹、僕の足元に座っている。くねらせた尻尾が、別個の意志を持った生命体のようだ。
「……え、あ、猫？」
「俺は猫だが？」
それがどうした、と目の前の猫が口を開いた。とりあえず頬をつねってみる。痛い。

その瞬間、僕は気付いた。

……そもそも打った腰が痛いのだから、更に頬をつねる必要なんて無かったのだということに。
「……腹話術？さもなきゃ失業のショックで僕の頭が……」
僕は痛くなった頬もさすりながら呟いた。

しかしこの虎猫、どこか見覚えのあるような……いや、猫なんてみんな一緒にしか見えないからそのせいか……？
「そんなんじゃねえよ」
その深緑とも青ともつかない目を細めて、にやりと猫が笑った――ように、見えた。
歩道の縁石に座り直した僕の隣に、するりと近寄ってくる。先程までとうもろこしに夢中で気が付かなかったが、雨に濡れた頭が冷たい。
「……じゃあ、自分で喋ってるの？」
「ああ」
当然のように僕の隣に座って、猫が頷いた。その虎縞には一滴の水滴も着いていない。
「……」
僕が何も言えずに猫を見つめていると、虎猫は「別に信じる必要なんて無いさ」と言い、くくと笑った。
笑いが納まってしばらく、まだ僕が呆けたように猫を見つめていると、彼はちらりとこちらを見上げた。そして、
「お前、仕事クビになったんだって？」
唐突にそう言った。
「な、ななな……何でそれをっ！？喋るだけじゃなくてテレパシーまで使えるの！？」
「違ぇよ。さっき自分で言ってただろうが」
「えぇ？知らないよ僕は」
「馬鹿だなお前。自分で言ったことぐらい覚えてろよ。そんなんだからクビになるんだ」
「うるさいやい」
何気なく返して、僕は猫から視線を外して前を向いた。
やはり、微妙な目の色といい、長い尻尾といい、どこか記憶に引っ掛かるところがあるような無いような……やっぱ無いな。うん。僕に猫の知り合いなんていないはずだし。猫を飼ったこともないし。

気のせいに違いない。
「で……えっと、だから何？」
前を向いたまま僕は言った。初対面だったし、虎猫の態度は横柄だったが、僕は何故か敬語を使う気になれなかった。
……と言うかそもそも、この猫はどうやって喋っているのだろう。声帯の構造はどうなっているのだろうか。
「あ、そうそう、お前、そんなに気を落すんじゃねえよって俺は言いたかったんだ。明日には明日の風が吹くさ」
「気休めならいらないよ」
「気休めなんかじゃないさ」
僕がぶすっとして言うと、猫はにやにやと笑い、体を静止させたまま耳だけをぐるぐると動かした。
「猫の言いなりになるしか出来なかった奴でも大富豪になれたんだからな」
「……へぇ」
どうやって猫一匹でそんなに金を稼いだのだろう。わらしべ長者じゃあるまいし、とんだ物語である。
「……」
「……」

……だがこの喋る虎猫の言うことなら、信じられる気がした。

目の前の猫には、きっとそれが出来たのだ。
「……ど、どうやって？」
僕が呟くと、猫はくくくと再び笑った。深緑とも青ともつかない目が僕の視線と合う。大きな猫の目の中に僕が映っているのが見えて、その僕は、

――背筋が、ぞくりとした。
雨に濡れたせいだろうか。

僕が思わず猫から目を逸らすと、彼は小さく鳴いた。
「さあ？どうしたんだろうな？」
そしてぱたん、と尻尾をアスファルトの上に打ち付けた。隣にあるとうもろこしのヒゲはこそりとも動かない。
そして猫は立ち上がり、通路の出口まで音を立てずに歩いていった。
「さて、雨も止んだことだし、そろそろ俺は行くよ」そして僕に背を向けたまま、唐突に言った。
「……そう？じゃあね」
何故か、「どこへ？」とは聞けなかった。
僕も立ち上がり、ヒゲを取ったとうもろこしを抱えて通路の入り口に立った。見上げると、雲の合間から夏の眩しい光が差し込んできている。
「ああ……もう会うこともないだろうが、な」
猫は俺を見上げ、そして水溜まりに足を踏みだした。

「……×××！」

猫が波紋すら立てずに水溜まりの上を数歩行った時、僕は自分の口がその猫の名を呼んだのを感じた。
それは僕自身の行動のはずだったが、僕は何故自分がそんなことをしたのかよく分からなかった。
無意識の行為だったのだろう。

確かに僕はその猫の名を呼んだはずなのだが、何と呼んだのかさえ全く覚えていないのだから。
猫は僕の声を聞いていたのかいなかったのか、一瞬立ち止まって尻尾をゆっくりと一回転させ、そして――

そして――――――走り始めた。

道を一直線に走っていったのだが、見る見るうちにその虎縞の体は小さくなり、瞬く間に見えなくなってしまった。
後に残されたのは僕一人だけだ。

「さて……僕も行くか」

やがて僕もそう呟いて、ぴしゃりと水溜まりのなかに足を踏み入れた。

空は青く晴れて、薄く虹が出ていたのだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8071g/

猫の命は九個ある

2010年10月10日01時28分発行